

1986年度
キネマ旬報ベスト・テン
文化映画部門 第2位

ユートピアと悪夢、パラダイスと死線
記憶の輪郭をたどる、それぞれの言葉

大日向村の46年

満州移民・その後の人々

第一部 分村移民の軌跡

第二部 語る——過去と現在をつなぐもの

山本常夫 監督

構成: 若月健一・小泉修吉・山本常夫 | 演出: 山本常夫 | 撮影: 山口誠・沢幡正範

撮影助手: 田村圭三 | VE: 隅田一明 | ナレーション: 村松康雄 | タイトル: 河原動画制作室

プロデューサー: 小泉修吉 | 製作: グループ現代 | 1985年 | 155分 | カラー

協力: 佐久町大日向のみなさん | 軽井沢町大日向のみなさん | 佐久町教育委員会 | 東宝株式会社

制作協力: 映画「大日向村」を観る会 | 佐久総合病院 | 朝日放送株式会社

配給: グループ現代 | 配給協力: 長野映研

出発から46年を経て、私たちに語り始めてくれた人々の記録

この映画は、昭和59年夏、

“幻の映画”と呼ばれていた劇映画

『大日向村』(1940年)が発見されたことをきっかけに

長野県にある二つの大日向で満州へ移民した人々を訪ね、

戦争で国の政策に翻弄された

彼らの満州での経験とその後を記録したものである。

国家とは、人間とは何か

昭和13年、全国で初めて、村の半分という大規模な開拓団を旧満州へと送り出した大日向村(現・南佐久郡佐久穂町)。その出来事は模範的な農村の姿として賞賛され、小説や劇、映画まで製作された。それまでは名もない山村であった「大日向村」の名は一躍日本国中に宣伝され、以後政府は、全国から多くの開拓団を旧満州へ送り出していった。満州大日向村は開拓のモデルケースとされたために旧満州でも格好の土地を与えられたといわれる。しかし、敗戦によって、

わずか8年足らずで大日向村の「王道楽土」の夢は崩れ去った。敗戦により満州大日向村を脱出した人々は、長春(旧新京)での一年近い難民生活の間に団員(674名)の半数以上を亡くし、昭和21年9月、やっとの思いで母村大日向村に引き揚げてきたが、移民した際に財産は一切処分していたために、母村に長く留まることが出来ず、昭和22年2月、65戸165名の人は再び故郷を離れ、もう一つの大日向——軽井沢町大日向をつくった。こうして現在、長野県に二つの大日向がある。

戦争を経験した世代にとって、大日向村は記憶に生々しい地名である。(中略)

われわれがあいまいなままに記憶の片隅に追いやっていたこの過去に、

あらためてじつに鮮烈な光を当て、

その無残な細部をまざまざと蘇らせてくれる映画である。

佐藤忠男(映画評論家)



製作から40年の時を経て劇場公開決定

2024 7.26金 - 8.8木

※下記以外の上映時間は劇場へ直接お問合せください

長野相生座・ロキシー

TEL 026-232-3016

長野市権堂2255(権堂アーケード通り中央)

イベント予約受付中



イベント
開催決定

7.27土 13:00~の上映後

7.28日 10:00~の上映後

対談 | 山本常夫監督・飯岡詩朗(信州大学 人文学部 教授)

講演 | 大串潤児(国立歴史民俗博物館 教授)

トーク時間は両日
30分程度を予定